

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。小松教務所

「今年はこのような状況下でも報恩講をするのですか？」

新型コロナウイルスの感染が広がる中、10月から北陸では報恩講の時期を迎え、例年と違った形で執行された寺院も多かったのではないのでしょうか。自坊でも門徒さんから冒頭のような質問を受けました。私も初めて経験する状況に戸惑いながら、改めて報恩講を勤修する意味を考えるきっかけをいただきました。

報恩講は、親鸞聖人をご縁として聞法する、真宗門徒にとって一番大切な仏事です。ご門徒さんと一緒に長い時間をかけて準備します。しかし、いざ当日を迎えると、日程をこなすことに注意がいき、慌ただしく過ぎていくのです。今一度、立ち止まり考えてみたいと思います。

「“教えを聞く”という立場になっていませんか？」とは、以前法話をしていたいただいた先生の言葉です。続けて「“教えを聞く”ということは間違い

ではないけれど、真宗では“教えに聞く”ことを大事にされてきています。“を”でなく“に”が大切なのです」と言われ、戸惑った事を思い出しました。これまで教え“を”聞いていた私です。“教えを聞く”と“教えに聞く”とは一体どう違うのでしょうか。

考えてみれば、私が“教えを聞く”時、ともすれば、聞きたくない言葉は耳に入ってこず、聞きたい言葉ですら、私の「思い」で都合のいい解釈をして納得したような気持ちになっていたのかもしれない。

一方、“教えに聞く”とは一体、“何を”聞くのでしょうか。

報恩講



例えば、人の長所を褒めることより悪口や噂話の方が盛り上がった経験は、皆さんにもあるのではないのでしょうか。“他人の悪口は嘘でも面白いが自分の悪口は本当でも腹が立つ”とはよく言ったものです。自分の悪い部分を他人に言い当てられると腹が立ちますが、そんな自分を棚に上げて他人の悪口を面白いがる自分もいます。どちらも私です。

自分の事を棚に上げて悪口を言うその棚に上げた自分は、自分自身ではしっかりと見ることはできません。それを見せてくれるのが仏法だとすれば、“教えに聞く”のは棚に上げた自分自身です。



自分を棚に上げている姿は、仏法を通してでなければ見えてこないのかもしれないかもしれません。私も家族からの指摘ですら「しかし」「やけども」と言って自分を守り、「私は間違っことはしていない」という「我」が最後まで残



っている気がします。“教えに聞く”、つまり、自分を問うという聞き方がなければ、どれだけ仏法を聞いてもどこまでも他人事で、自分に関係のない「ためになる仏教の話」で終わってしまうのかもしれない。

今回の門徒さんからの質問は、毎年迎えていた報恩講の一番大切な事に気づかされるきっかけとなりました。そして、今年のお坊報恩講は、様々な思いの中、門徒さんと相談し、感染拡大に注意しながら日程を変更し勤修しました。

全員がマスクをつけてのお参りも見慣れた風景となりましたが、やはりマスクなしの大きな声で皆さんと一緒に勤めする日が一日も早く訪れてほしいものです。来年の今頃は、一体どういう状況に



なっているのかは誰にもわかりません。しかし、いつも外（他人）ばかりに向けている眼を内（自分）に向けて、自分自身を問う時間を皆さんと共有できる、そんな報恩講を門徒さんと一緒に作っていきたいと思います。

白山市白峰 真成寺 杉浦真信